

# 第97回愛知学院大学モーニングセミナー



## いま、なぜ、『罪と罰』か？

ドストエフスキーの生きた時代から  
現在の日本社会を考える

亀山郁夫(名古屋外国語大学学長)

---

2014年4月8日

# 平野啓一郎との対話

(『中央公論』7月号)

2008年6月8日のこと

はじめに

---



•『罪と罰』の出発点——1849年12月22日 死刑判決

ペトラシェフスキー裁判

罪と罰の不条理をどう経験したか

死刑と恩赦

•孤独の意味——イエス・キリストと自分の同一化

「エリ・エリ・レマ・サバクタニ」

——「神よ、神よ、なぜ、わたしを見捨てるのですか？」

•皇帝権力の茶番だと知るのはいつか？

もしも、自分を救うことがわかっていて、死刑宣告をしたとすれば、それは、このキリストと同じ立場にあったことを意味するのではないか？

ドストエフスキーは、それが茶番であることを知っていたのか？

シベリアでの体験はどう生きたか？

救済の観念の誕生は正しいか？

# 1 国事犯ドストエフスキー

---

## •1865-66年のロシア

農奴解放後の混沌

自由という観念、「金」という新しい神の誕生

ペテルブルクの人口増加

犯罪、飲酒、売春がはびこり、作家を絶望に陥れる

第二回目のヨーロッパ旅行→ルーレット狂い

## •ヴィスバーデンでの奇跡

『告白』『酔いどれ』の2つの小説が同時並行  
日記体による一人称の告白小説

## •劇的な変更

1865年12月→劇的な変更      一人称→三人称へ

# 2 創作の歴史

---

## 第1部

- ・ 1日目（7月7日）  
殺人計画のための下見、金貸し老女宅訪問  
帰り道、居酒屋で小役人マルメラードフと会う
- ・ 2日目（7月8日）  
母から手紙が届く。センナヤ広場で、金貸し老女と同  
居する妹リザヴェータが、翌日出かけることを知る。
- ・ 3日目（7月9日）  
金貸し老女とリザヴェータを殺害

# 3a 物語の梗概

---

## 第II部

- ・4日目（7月10日）

警察署に呼び出され、その場で卒倒、盗品を隠し、  
親友ラズミーヒンを訪ねる

- ・5／6／7日目（7月11、12、13日）

意識不明のまま眠り続ける。

- ・8日目（7月14日）

朝10時、意識回復。夜、金貸し老女宅を再訪  
マルメーラドフ、馬車にひかれる。母と妹が状況

## 3b 物語の梗概

---

### 第III部

#### ・9日目(7月15日)

予審判事ポルフィーリーを訪問→「対決」  
老女殺しの夢、スヴィドリガイロフの訪問

### 第IV部

夜、家族とともに妹の婚約者ルージンと会う。ソーニャを訪問  
「ラザロの復活」を朗読してもらう。

#### ・10日目(7月16日)

ポルフィーリーを訪問→2度目の「対決」、ミコライの自首

### 第V部

マルメラードフ家を弔問。ソーニャのアパートへ。  
「大地に口づけを」

## 3c 物語の梗概

---

## 第Ⅵ部

11／12日目(7月17日、18日)

ラスコーリニコフの記憶が混濁

13日目(7月19日)

クレストフスキー島で目を覚ます。

ポルフィーリーと3度目の「対決」

スヴィドリガイロフと料亭で話し合う。

14日目(7月20日)

母と妹と別れを告げたあと、ソーニヤの部屋へ

センナヤ広場で大地に口づけし、警察に自首

エピローグ

# 3d 物語の梗概

---



## ロジオン・ロマーノヴィチ・ラスコーリコフ 2つのレベルでの分裂

### 何が引き裂かれているのか

- 1 神と悪魔
- 2 「運命の書」と「意志の書」

### 運命をかえる2つのモチーフ

- 1 母親の手紙
- 2 「馬殺し」の夢



# 4a 引き裂かれた者

---

## •聞き違いのモチーフ

「6時すぎ」 → В семом часу

「7時に」 → В семь часов

「迷信深い人間は、神の恩寵と、悪魔の偶然の見定めが見つからない」

## 4b 引き裂かれた者

---

## ナポレオン主義は、間違っているのか？

歴史的眞実としての殺人の「肯定」  
ナポレオンになることは、「父」となること  
「母殺し」の物語として読む

### 母殺しーイワーノヴナ

アリョーナ・イワーノヴナ  
リザヴェータ・イワーノヴナ  
カテリーナ・イワーノヴナ



## 5 ナポレオン主義



## 3つの部屋→棺のイメージ

ラスコーリニコフ、ソーニャ、スヴイドリガイロフが「棺」を共有する  
→屋根裏部屋、奇妙な部屋、アドリアノポリのホテル

## 一線を踏み越えてしまった者——死者

罪——преступление (переступить) 「またぎ越すこと」

「部屋というより戸棚という感じだった」

「部屋というよりは、納戸に近かった」

「部屋というよりもどこか戸棚を思わせるところがあった」

(His room ... resembled a closet than a place of habitation)

## 6 棺から甦る

---

